欠損風俗店アクロト

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
　欠損風俗店アクロト

【Ｎコード】
　Ｎ８９１３ＨＰ

【作者名】
　ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
　身体の一部を欠損した女の子たちが働く風俗店のお話です
あえて欠損部位を使ってエッチな事をするのってとても素敵だと思います
※この作品は以前ｐｉｘｉｖに投稿したものと同じ内容になります

第一話　指名：ミツ（左腕欠損）

いらっしゃいませ、欠損専門風俗店アクロトでございます。
ここではお客様の欠損フェチを満たすような、身体の一部を失っている女性との素敵なひとときをお楽しみ頂けます。
なお、注意点といたしまして当店はリョナ風俗ではございませんので暴力などは一切禁止となっております。

それではお相手となる女の子のご指名をお願いいたします。
只今ご指名いただけるのはこちらの４人です。

・ネナ　欠損部位：四肢
・ミツ　欠損部位：左腕
・ユン　欠損部位：右眼
・トヨ　欠損部位：乳房・性器・右腕

……ご指名はミツですね、かしこまりました。

では先にシャワーを浴びて、あちらのお部屋でお待ち下さい。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

初めて訪れた欠損風俗店、見せてもらった女の子のプロフィールリストから僕はミツさんを指名した。

受付で言われた通りシャワーで念入りに身体を清め、パンツ一丁の姿のまま指定された部屋に入る。
ベッドしかないその部屋は、まさにセックスをする為だけに使うんだという印象だった。

ミツさんのプロフィールに書かれていた左腕欠損。顔写真には当然写っていないその部分が実際にはどんな感じなんだろうと想像し、ソワソワしながら僕は彼女の到着を待っていた。

ガチャ……

（来たっ！）

「ご指名ありがとうございまーす！ミツって言いまーす、よろしく～」

明るい声とともに部屋に入ってきたのは、受付で見た写真通りのとても美人な女性だった。プロポーションだって申し分なくて、身体にピッタリとフィットした服がおっぱいの大きさや腰の細さをこれでもかと強調している。
こんな綺麗な人とエッチな事ができるだけでもこのお店は大当たりに間違いない。でも、そんな女性としての性的で魅力的な部分よりも、もっともっと僕の目を惹いて離さない物があった。

「あ、やっぱり一番気になるのはココなのかな？ちょっと動かしてあげよっか。はい、ヒラヒラ～」

僕の熱烈な視線に気付いたミツさんは、そう言って左腕を振る。途中から中身の無い袖がヒラヒラと揺れ動く様子を見ると、もう彼女に左腕、それもどうやら肘の少し上から先が欠けている事がハッキリとわかってしまった。

（本当に、腕が無いんだ……）

初めて生で見た人体欠損とそこをこれから好きに出来るという期待に、僕の呼吸はどんどん荒くなり股間に血が集まっていく。あっという間に僕のペニスはガチガチに勃起して、パンツの中で大きく存在を主張していた。

「おー、大興奮って感じだね～。おちんちんもギンギンだ。やっぱりこういうのって好きなんだ」

「はい、実際に目の前で見せてもらえてとても嬉しいです」

「欠損に興奮するなんてお客さんも変態だよね～。ま、このお店に来る人はみんなそうなんだけどさ。じゃあ時間ももったいないし早速はじめよっか」

僕が欠損フェチであることを特に気にする様子もなく、ミツさんは服を脱ぎ始める。

現れた左腕の断端に目を奪われているうちに、彼女は手慣れた様子で下着までを脱いで全裸になっていた。

「あの、服を脱ぐのお上手ですね」

「ん？ああ、こんな身体になってからもう長いからね～。流石に慣れちゃった。最初の頃は色々不便で辛かったけど今は殆ど困ってな

いよ」

僕のある意味失礼なつぶやきも、ミツさんは丁寧に拾って話を広げてくれる。何気ない会話の中に腕を失った人の日常を垣間見た感じがして、そんな背徳感に近い感情がドキドキを加速させた。

さっきの言い方だとミツさんの左腕は後天的に失われてしまったんだろう。元々は存在していたはずの物が今はもう無いという喪失感に、僕の興奮は着実に高まっていく。

「でもお客さん本当に断端ばっかり見てるね。流石におっぱいとかに見向きもしないのはちょっと珍しいかな〜」

「あっ、すみません……」

「いやいや、別にそれが悪いとかは全然思ってないよ。もしかして断端を実際に見るのは初めて？」

「はい」

「じゃあ仕方ないよね。ほら、触ってもいいんだよ？」

ミツさんが突き出してくれた左腕に手を伸ばす僕。初めて触れた断端はプニプニと柔らかく、ちょっと触っただけでその感触が病みつきになりそうだった。

「どう？柔らかくて気持ちいいでしょ〜。遠慮しないでもっとがっつり弄っても大丈夫だよ」

許可をもらった僕は待ってましたとばかりにミツさんの左腕全体を

撫で回していく。断端以外にも肩や脇、二の腕全体を満遍なく撫でると、彼女の腕がとても短くなってしまっていることが強く感じられて興奮してしまう。

ミツさんの左腕を一通り堪能した僕は、断端をじっくりと観察してみる。切断面の部分には十字状の傷跡がうっすらと残っていて、更にその中心部にはおへそのような窪みがあった。彼女には申し訳なく思うけれど、この傷跡と窪みから切断後の傷口にどんな処置をしたのかを勝手に妄想するのもとてもワクワクしてしまう。

わき上がる好奇心のままに傷跡に沿って指を滑らせると、ミツさんは肩をピクンと震わして小さく声を漏らした。痛がっている様にも見えるその反応に、僕は慌てて彼女の左腕から手を離して様子を確認する。

「あっ、ごめんなさい……もしかして痛かったですか？」

「ううん、くすぐったいだけだから大丈夫。傷跡って皮膚が薄いからか敏感なんだよね。ほら、続けて続けて」

やらかしてしまったかと思ったけれども、どうやら平気だったらしい。

続きを急かされた僕は断端を見たときからずっとやってみたかったある事を提案してみる。

「あの……今度は舐めてみてもいいですか？」

「ふふっ、舐めたいだなんてお客さん筋金入りだね～。もちろんいいよ」

我ながらド変態なお願いだと思ったけれども、ミツさんは笑って受け入れてくれた。

断端に口を近づけて思いっきりむしゃぶりつくと、不思議な高揚感に包まれる。もちろんそこはただの皮膚でしか無いのだから特に変わった味なんてしないけれども、普通の人には無い特別な場所を舐めているという事実は僕の身体をとても熱くさせていく。

（もう我慢出来ないっ……射精したいっっ！！）

興奮が最高潮に達し、射精欲が溢れ出す。
でも、ペニスを刺激しようと股間に移動させるつもりだった僕の右腕は、ミツさんの右手によって制止させられてしまった。

「ひとりでシゴくなんて寂しいことしないでよ～。おちんちんは私が触ってあげるからお客さんは断端に集中しててね」

そう言ってミツさんは僕のペニスをやさしく握り、手慣れた動きで手コキを始めてくれる。
自分の物とは違う女性の柔らかい手の感触や絶妙な力加減に、とっくに限界を迎えていた僕のペニスはあっという間に射精の準備を完了させていく。

「ミツさんっ、もう出そうです……！」

「いいよ～。断端モミモミペロペロしながらおちんちんシコシコされて、思いっきり射精しちゃえ！」

「あぁ……で、出ますっ！……ううっ！」

……ドピュッ！！ピュルッ！ピュルルッ！

ミツさんの断端に吸い付いた体勢のまま、僕は思いっきり精液を吐き出した。

密かに憧れ続けていた欠損をオカズにしての射精はただの手コキよりも何倍も気持ちよくて、そのあまりの衝撃を落ち着けるように僕は深呼吸を繰り返しながら全身で余韻を堪能する。

「いい射精っぷりだったね～。そんなに気持ちよかった？」

「はぁっ……はぁっ……ありがとうございます、最高でした」

「喜んでくれたなら良かった。残り時間は……あと半分くらいだね」

そう、まだ時間は半分も残ってる。この後もまだまだ楽しめると思うと、射精によって落ち着いた興奮がジワジワと再点火していく感じがした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「じゃあ次は～、こっちでおちんちん触ってあげるね」

ミツさんは短い左腕をピョコピョコと振りながらそう宣言してきた。

断端を使ったペニスへの愛撫という欠損フェチのツボをきっちり把握している提案に、彼女への信頼度は大きく上昇する。ここまでフェチを理解してくれているのなら、いっそ今日は全部を彼女に任せて存分に楽しませて貰おうと思った。

そんな事を考えている間にミツさんは僕の腰のあたりに陣取って、射精後の萎えたペニスを見つめていた。
僕の視線に気づいたのか彼女も一度こちらの顔を見上げ、ニッと笑ってから僕の顔を見つめたまま左腕の断端をペニスに押し付けてくる。

フニッ……クニュッ……クニュッ……

さっきまでも散々揉んだり舐めたりして感じていた断端の柔らかさを、今度はペニスで楽しんでいく。
ミツさんにとってはある意味で女性器よりもデリケートだと言えるような部分。そんな大切な場所を性欲発散の為に使わせてもらってるんだと思うと、物理的な性感以上に倒錯感や背徳感による精神的な興奮を強く感じられた。

「おちんちんだんだん硬くなってきたね～。どう？断端コキって良いものでしょ？」

「はい……めちゃめちゃ興奮してます……！」

断端を器用に使って僕のペニスをこねくり回しながら断端コキの感想を聞いてくるミツさんに、僕は素直に回答する。
指どころか手の平、肘さえも存在しないミツさんの左腕では当然ペニスをシゴいたりするような動きなんてできないから、刺激の気持ちよさで言えばさっきの手コキのほうが良かったのは間違いない。
けれどもそんなもどかしい不自由さこそが欠損や断端への興奮をより強く感じさせてくれて、僕のペニスはグングンと勃起しすぐに臨戦態勢になっていった。

「よしよし、おちんちん準備完了したね。じゃあもっともっと気持ちよくしてあげる」

完全に勃起しきったペニスに対し、ミツさんはついに右手や口を解禁して奉仕をしてくれる。

左腕と右手でペニスを挟むようにシゴかれて、断端の柔らかさと指のしなやかさを左右別々に感じるというとても贅沢な気持ちよさ。更にそこにフェラチオまで加わって、僕はもうこれ以上我慢なんてできなくなった。

「ミツさん……もうダメですっ……出ちゃいますっ……！」

でも、僕の声を聞いた瞬間にミツさんはピタリとペニスへの愛撫を停止させる。

「おっと、あぶないあぶない。私も調子に乗っちゃった」

「あっ……？えっ？そんな……」

「よし、まだ出てないね、セーフセーフ。ん？そんな悲しそうな顔しないでってば、これからもっと凄いことしてあげるからさ」

突然の寸止めに困惑する僕に対し、ミツさんはやさしく話しかけてくれる。

あまりにもあんまりなおあずけに抗議したい気持ちもあるけれど、今日は彼女の言う通りにすると決めていたのもあって、僕はおとなしく次の展開を待つことにした。

「ちょっとだけ待っててね～。これを……こうして……」

ミツさんは右手の親指、人差し指、中指の３本を断端の中心にある窪みに突き立てて、更に中に押し込んでいるみたいだった。

「よしっ、掴めた。後は……んっ……んうぅっ……！」

断端に突き立てられた３本の指が、何かを掴んで引っ張り出すような動きに変わる。

段々と見えてきたその引っ張り出されている物は、白い棒状の何かのようだった。その形状を見て僕は彼女の行為についてひとつの可能性に思い至ったけれども、とてもそんな事がリアルで可能だとは信じられない。

（もしかして……？いや、でもまさか、そんな事が本当に……？）

僕の疑問と葛藤をよそに彼女は棒状の何かを引っ張り続ける。断端の中にしっかりと埋まっていたであろうその白い棒は、＜骨＞と言い表すのがピッタリの代物だった。

「ふぅ……あとちょっと………取れたっ！！」

ズル……ズル……スポンッ！！というような擬音が聞こえてきそうな光景とともに、ミツさんの左腕から白い棒が完全に引き抜かれる。腕から骨を引っこ抜くなんてとんでもない事のはずなのに、平然としているミツさん本人や一切出血していない様子のない左腕。僕は驚きを隠せないまま、彼女の顔と左腕を交互に見続けてしまう。

「えっ……？骨……？えっっ？」

「ビックリしちゃった？私の左腕の骨は偽物でね、簡単に抜けるよ

うになってるんだよ」

「そうだったんですか……ビックリしましたよ。どうしてそんな事を？」

「もう、本当はとっくにわかってるくせにさ〜。おちんちんを挿入できるようにだよ。凄いでしょ？」

確かに凄い。骨を抜き取った後の断端への挿入という行為を想像したことは今までもあったけれども、それはとても猟奇性の高いものだからあくまでフィクションとしてのイラストとかだけで楽しむつもりだった。

今日だって実際にミツさんの欠損を堪能させてもらっているけれども、断端挿入なんて出来るわけがないと思っていたし、そもそもそんな事を考える事すら駄目だとも考えていた。

でも、彼女の方からそれを提案してくれた以上はもうそんな躊躇なんて必要無い。寸止めされてからクールダウンされつつあった僕のペニスは、断端挿入への期待感に一気に熱を持ち始めていった。

「おまたせ！準備できたよ。ローションもたっぷり塗り込んだし、いつでも挿入できるよ」

どうやらミツさんの方の準備も終わったみたいだ。

彼女は左腕を右手で支えながら、ローションでヌルヌルになった穴の入り口を僕に差し出してくれる。

「骨が無くなったからもう自力じゃ動かせないんだ。だからオナホールみたいにお客さんの好きに使ってね」

「こんな事までさせてもらえるなんて夢みたいです……本当に……嬉しい……」

「ふふっ、世にも珍しい二の腕断端オナホ、ご堪能あれ～」

骨を失ったミツさんの左腕は人間の身体とは思えない位にブヨブヨとしていて、まさにオナホールと呼ぶのがピッタリだった。
二の腕の途中を掴むとそこから先がぐにゃりと垂れ下がってしまうという普通ではありえない光景と、そこに今からペニスを挿入できる期待感に、僕はゴクリと生唾を飲み込んでしまう。

両手でミツさんの左腕を抱え、断端に亀頭をくっつける。一呼吸おいて心の準備を整えた後、ゆっくりとペニスを穴の中に沈めていった。

クチュ……ヌプッ……ズププププ……

「あぁぁ……凄いっ……！気持ちいいいっっっ！！」

手コキとも、膣とも、シリコン製のオナホとも違う初体験の挿入感が一気に僕に襲いかかってくる。
自分の手で二の腕を握りしめるとその圧迫感がダイレクトにペニスに伝わってくる感覚はオナホと似ているけれども、人間特有の体温や筋肉の質感はシリコンなんかじゃ絶対に感じられないだろう。

二の腕オナホの感覚を少しでも長く楽しみたくて、今すぐにでも腰を前後させてペニスを刺激したい欲求を必死に抑え込む。
ペニスを奥まで挿入した状態でじっとしていると、体温だけではなく筋肉による程よい締付けや腕を流れる血液の脈動すらも感じられて、腕の中に挿入しているんだというのがハッキリとわかる。

「楽しんでるね～、気持ちぃいでしょ？こんな腕でも力を入れると少しなら締め付けられるんだよね。ほら、どう？」

ミツさんの言葉とともに二の腕の締め付けが少しだけ強くなる。キュッ……キュッ……と緩やかな力でペニスを締め付けられる刺激に元々ギリギリだった我慢は限界を超え、ついに僕は射精を目指して腰を全力で振り始めてしまう。

グチュッ！ズプッ！！　ジュプッ！ジュプッ！！

自分の両手を強く握り、一心不乱に腰を前後させてペニスをシゴく肉体的な快感。
そして、身体の一部をただのオナホとして扱いペニスをシゴくなんていう人間の尊厳を踏みにじるような行為を、相手の同意を得た上で行えているという精神的な高揚感。
肉体と精神の両方からの興奮によって、僕のペニスはたちまち射精の瞬間を迎えてしまった。

「はぁっ……！もうっ……出ます！！」

「どうぞ～。そのまま中に出しちゃっていいからね」

「ぐぅ……あぁぁ……！うっ！」

……ドピュッ！！　ドプッ！ドププッ！！　ビュルルル！！！

断端にペニスを最後まで突き入れた状態で、左腕の一番奥深い所に射精する。
二回目にも関わらず一回目より量も勢いも上回るような射精は、僕

の興奮と快感がとても大きかった証拠に間違いなかった。

全力の射精を終えて息も絶え絶えの状態で僕はベッドに倒れ込む。そうするとミツさんも僕と同じようにベッドに寝そべってくれて、僕たちはお互いに顔を見合わせるような体勢で横になっていた。

「すっごい気持ちよさそうに射精してたね～。腕の中が精液でたぷたぷだよ」

「はぁっ……はぁっ……めちゃめちゃ気持ちよかったです。間違いなく過去最高の射精でした」

「過去最高ってセックスよりも？流石に言い過ぎじゃないの～？」

「全然言い過ぎなんかじゃないです。もう普通のセックスじゃ満足できなくなるんじゃないかって少し不安なくらいなんですから」

「ふふっ、それは困るな～。いや、また指名してくれるってことだから私としては良い事なのかな？」

断端オナホの感想を聞いてくるミツさんとそれに答える僕。まだまだ収まらない射精の余韻を楽しみながら穏やかなピロートークを続けていると、彼女が自分の左腕を右手で掴んで僕に突き付けてきた。

「ほら見て、ちょっと握っただけでお客さんの精液がいっぱい溢れてくるよ」

ミツさんが左腕を握る度、腕の中に溜まっていた精液がゴポッ……ドロッ……っという感じで溢れ出してくる。

断端に残る傷跡と中央に空いている穴、そしてその中から流れ出て

くる白濁液の組み合わせは率直に言ってとてもエロい光景だった。

「ははっ、なんかすっごくエロいですね。……あっ、時間ってどうなってます？」

「んー？……これでピッタリ終わりって感じかな。今日は楽しかった？」

「はい！欠損した女性とエッチな事をするっていう夢がかなった最高の体験でした！」

「喜んでくれて良かった良かった。うちの店には私以外にも色々な部分を欠損した女の子たちがいるから、また来てくれると嬉しいな。あ、また私を指名してくれてもいいからね？」

確かに受付で見せてもらったプロフィールにはミツさん以外にも様々な部位を欠損した魅力的な女の子が並んでいた。

次はいつこのお店に来ようかと頭の中で予定表を広げながら、僕は退室の準備をし始めたのだった。

第二話　指名：ユン（右眼欠損）

いらっしゃいませ、欠損専門風俗店アクロトでございます。

ここではお客様の欠損フェチを満たすような、身体の一部を失っている女性との素敵なひとときをお楽しみ頂けます。

なお、注意点といたしまして当店はリョナ風俗ではございませんので暴力などは一切禁止となっております。

それではお相手となる女の子のご指名をお願いいたします。

只今ご指名いただけるのはこちらの４人です。

・ネナ　欠損部位：四肢
・ユン　欠損部位：右眼
・アイ　欠損部位：両足
・カヤ　欠損部位：陰核・乳首

……ご指名はユンですね、かしこまりました。

では先にシャワーを浴びて、あちらのお部屋でお待ち下さい。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

久しぶりに訪れた欠損風俗店。
俺はいつも通りに受付での指名と諸々の準備を済ませ、部屋で待機する。

今日指名したユンちゃんの欠損部位は右眼。プロフィールの顔写真でも白い眼帯がとても目立っている女の子だった。
彼女を指名するのは初めてなので、どんな子なんだろうと考えるとちょっとワクワクしてしまう。

ガチャ……

「お客様、本日はご指名ありがとうございます。ユンと申します」

落ち着いた声とともに部屋に入ってきたユンちゃんは、とてもクールな雰囲気を漂わせている細身の女の子だった。
その丁寧な喋り方と綺麗な立ち姿は、なんとなく貴族の家に仕えるメイドさんのようなイメージが思い浮かぶ。

「こちらこそ今日はよろしくね、ユンちゃん。早速なんだけどその眼帯の下を見せてもらっていいかな？」

挨拶もそこそこに欠損部位を見せてもらうように頼む。
初対面の女の子にいきなり眼帯を外せなんて普通なら失礼にも程があるけれども、ここはそういうお店なので遠慮は要らない。

「かしこまりました、お客様」

その証拠にユンちゃんだって気を悪くした素振りはまったくなく、素直に眼帯を外してくれる。
ただ、そこには空っぽの眼孔か傷跡でもあるのだろうという俺の予

想とは裏腹に、眼帯の下には一見普通の眼球が存在していた。

「あれ？右眼あるの？」

「ああ、こういうことですよ」

俺の疑問を聞いて、ユンちゃんが躊躇なく自分の右眼を指で叩く。突然繰り広げられた痛々しい光景に一瞬身を竦ませる俺だったが、彼女の右眼から聞こえてきたコツンコツンという硬い音に状況を理解する。

「ユンちゃん、義眼だったんだね。ビックリしたよ」

「えぇ、本物そっくりで良くできているでしょう？」

「確かに勘違いしちゃったよ。それってもちろん外せるんでしょ？」

俺のそんな質問に答えるようにユンちゃんは右眼に指を突っ込み、いとも簡単に眼球を抜き取って自分の手の平に乗せてしまう。彼女の義眼は一般的な物とは違って球体で、手の平に乗ったまん丸のそれはまるで本物のようなリアリティを持っていた。

「普通の義眼はもっと薄っぺらいって聞いたけどユンちゃんのは球体なんだね」

「はい、球体の方が眼孔が塞がらないので穴として使うのに都合が良いんです」

「穴って……いいねぇ、俺も楽しみだよ」

明らかに眼孔への挿入を想定しているユンちゃんの言葉に思わず息を飲んでしまう。
当然このお店ではそういう事もできるだろうと期待はしていたけれど、実際に言葉にされると興奮もひとしおだった。
ユンちゃんは一旦義眼をテーブルの上に置いてから、改めてこちらに向き直る。
右眼の部分がポッカリとくり抜かれている彼女の顔は喪失感や背徳感などが入り混じった不思議な魅力を放っていて、俺の手は誘われるかのようにゆっくりとその穴へ伸びていった。
「触る前にひとつだけ。眼孔は脳に近いとてもデリケートな部位なので、絶対に乱暴に扱わないようにお願いいたします」
「大丈夫、わかってるってば。優しくするから安心しててよ」
ユンちゃんから提示された眼孔を触る時のルールを了承する。こっちだって酷いことをするつもりはさらさら無い。
「では、どうぞ」
子供があっかんベーをするように、人差し指で自分の下瞼を引っ張るユンちゃん。大きく広げられた右の眼孔の奥に見えるピンク色の粘膜は、これから行われる行為も相まって女性器の様なエロさすらも感じさせる。
彼女の脳を万が一にも傷つけてしまう事が無いように細心の注意を払いながら、俺はゆっくりとそのエッチな穴の中に指を挿入していった。
「うおぉ、すっげぇ……ほんとに入ってく……」

眼球が無いのだから指が入るのは当たり前だけれども、そもそも<眼球が無い>という事自体が普通じゃない。
そんな非日常な状況への高揚感やドキドキを感じながら、眼孔の奥へと指を進めていく。

ピトッ……

第二関節あたりまでが入ったところで指先が眼孔の一番奥に触れる。柔らかくて少し湿った感触は間違いなく粘膜の物。でもそこには膣のような指全体を締め付ける感覚や、口のような吐息の生暖かさは一切無い。
そして何よりもユンちゃんの右眼部分に俺の指が突き刺さっている光景に、眼孔への挿入を実感して興奮が高まっていく。

「お客様、いかがでしょうか？」

「すごいよ……マンコとも口とも違うけど、でもちゃんと粘膜の穴って感じでめっちゃエロいね……」

「喜んでいただけたようで良かったです。奥へは駄目ですが側面なら多少押し込んでも平気ですので、もっと触っても大丈夫ですよ」

ユンちゃんからの許可を貰ったので、もう少し大胆に眼孔をまさぐってみる。
プニプニとした柔らかい肉の感触はまるでほっぺたを内側から触った時のようで、その気持ち良さが病みつきになりそうだ。
初めて触る眼孔の感触に夢中になって色々な方向を押し込んで遊んでいると、ユンちゃんがこちらを見ている事に気付く。

右眼をほじくられているのを気にする事もなくこちらをただじっと見つめている彼女の姿はどこか倒錯的で、残された左眼の美しさに思わずドキリとしてしまった。

「眼孔って結構柔らかいんだね、骨があるからもっと硬いんだと思ってたよ」

「人間の眼球は、動かすための筋肉と保護するための脂肪に包まれた状態で頭蓋骨の中に収まっているそうです。私は眼球本体と筋肉を摘出していますが、脂肪はそのまま残っているので柔らかいのです」

ずっと無言なのもどうかと思って感想を伝えると、ユンちゃんは眼孔の構造について詳しく教えてくれた。

右眼に指を突っ込まれたまま平然と喋る彼女の姿をもう少し見ていたくなった俺は、会話を続けるために気になっていた事を聞いてみることにした。

「へぇー、流石に詳しいね。ねぇ、触られるのってどんな感じなの？実は気持ちよかったり？」

「頬の内側を触られてる感覚というのが一番近いですね。残念ですが気持ちいいというほどの刺激はございません」

気になって自分の口の中に指を入れてみる。

今まであまり意識したことは無かったけれど、確かに頬の内側を触っていても特に気持ちいい感じはしない。

「なるほどねー、こんな感じなんだ。確かに気持ちいいってほどじゃないね」

「ふふっ……あっ、失礼しました。この話をすると皆様そうやって自分の頬を触られるのでつい……」

「そりゃ、気になっちゃうじゃん？」

ユンちゃんに笑われてしまった……

多少気恥ずかしさはあるけども、好奇心を抑えることはできないんだから仕方ないと言い訳する。

「もしもっと詳しくお知りになりたいのでしたら、お客様も眼球を摘出されてみるのはいかがでしょうか？片目が無くても普通に生活するぶんにはあんまり困らないんですよ」

「さ、流石にそこまでは無理だよ……」

「まぁ、冗談ですが」

顔色ひとつ変えずに言い放たれた恐ろしい冗談を聞いて、ユンちゃんはもしかして結構Sなのかもしれないと思う俺なのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

そろそろ次の段階に進みたくなってきた。

一度ユンちゃんの眼孔から指を抜いて、次にさせてほしい事をお願いする。

「ねぇ、次は舐めてもいいかい？」

「えぇ、構いませんよ」

「あっ、そうだ。せっかくだしキスする感じにしたいから眼を閉じててくれる？」

「はい、わかりました」

俺の細かい注文にも素直に従ってくれるユンちゃん。
両目を閉じた俗に言う〝キス待ち顔〟をしている彼女を抱き寄せ、右の瞼に唇を寄せる。
まつ毛のチクチクを感じながら瞼に口付けをすると、唇同士のキスとは全く違う薄い肉の感触が返ってきた。
奥に眼球が存在していないユンちゃんの瞼はペラペラで、少し押し込むだけで簡単に凹んでしまう頼りなさが俺の興奮をかき立てる。

チュッ……グチュ……

もっと彼女の眼孔を堪能するために、舌をねじ込んで瞼をこじ開けていく。
涙のせいか少ししょっぱい右眼の中へ舌を進めていくと、流石にくすぐったいのかユンちゃんは身体をピクピクと震わせていた。
クールな彼女が反応してくれるのが楽しくて、口と舌の動きをもっと激しくしていく。
ディープキスで舌と舌を絡み合わせるかのように、ユンちゃんの上瞼に吸い付いたり裏側に舌を差し込んだりと責め立てる。吸い付けば伸び、舌を差し込めば広がる薄くて柔らかい瞼の肉は、俺の口を

とても楽しませてくれた。

瞼の感触をたっぷりと堪能した俺は、改めて眼孔の中に舌を突き入れていく。

粘膜を思いっきり舐め上げられるのはユンちゃんにとって刺激が強いみたいで、耐えるようにギュッと閉じられた瞼に舌が挟まれるのが気持ち良い感覚だった。

ジュルッ……ジュルルッ…………！

ポッカリと空いた眼孔にしゃぶりつく背徳感と、舌に感じる粘膜や瞼の感触、そして腕の中で震える女の子の身体の柔らかさやぬくもりに俺の身体も熱くなっていく。

いつの間にか勃起していたチンコをグリグリと押し付けるようにユンちゃんを抱きしめていると、彼女も気づいたようで俺の股間に手を這わせてきた。

「んふっ……くうっ…………お客様のココ、大きくなってますね」

「んちゅ……ぷはぁっ。ユンちゃんエロいんだもん、勃起もするって。ほら」

「へぇ……なかなか立派なモノをお持ちじゃないですか……」

眼孔へのディープキスを切り上げた後、パンツまで全てを脱ぎ去ってチンコを見せつける。

最初の頃よりも少しだけねっとりとしたユンちゃんの口調は、彼女もエロい気持ちになってきた証拠だろうか。

「そろそろチンコ挿れたいんだけど大丈夫？」

「もちろん眼に、ですよね……？ではまずあちらの椅子にお座りください」

お待ちかねの挿入。どこに挿れたいなんて言わずとも察してくれたユンちゃんは、部屋の一角にある椅子を指差す。

彼女が示した椅子は床にしっかりと固定された頑丈そうな物で、そういうプレイ用なのか至るところに拘束具が備え付けられていた。

とりあえず言われた通りに座った俺の身体を、ユンちゃんはテキパキと拘束していく。

縛られた部分は手首、足首、腰、太腿の４箇所。特に腰と太腿の部分はガッチガチに固定されてピクリとも動かせない状態にされてしまう。

「あれ、なんで俺縛られちゃってるの？」

「申し訳ありませんが私の身の安全を確保する為です。エスカレートした勢いで眼孔を突き破られたりしたら堪りませんので」

「あぁ……確かに脳みそまで入っちゃったりしたら危ないもんね」

「脳姦はNGですが、しっかりとご奉仕させていただきますのでご期待くださいね」

ローションのボトルを手に取り、目薬をさすかのように自分の右眼に流し込むユンちゃん。

人差し指と中指で眼孔のローションをグチュグチュとかき混ぜて準備を進める彼女の姿に、眼孔姦への期待感が高まって股間が熱くなっていった。

「お客様ももう準備万端みたいですね……おちんちんがガチガチになってますよ……」

ユンちゃんは椅子の前にペタンと座り込み、勃起具合を確かめるように俺のチンコを軽くシゴいてくれる。

完全に臨戦態勢に入ったオスの象徴を前にして彼女の方もスイッチが入ったみたいで、喋り方もどんどんエロい感じになっていく。

「ほら、眼孔くぱぁですよ……興奮しますよね？」

「最高だよ……めちゃめちゃエロくて興奮する……」

右手の親指と人差し指で瞼を上下に拡げてこちらを煽ってくるユンちゃんの表情は、ローションでテラテラと光る眼孔も相まってとんでもないエロさだった。

右手で拡げた眼孔はそのままに、左手でチンコを掴んで顔を近づけていくユンちゃん。

彼女は残された左眼を上目使いにして俺の顔を見つめ、目線を合わせたまま右眼の中にチンコを受け入れていった。

クチュッ……ヌプププッッ！！

「あぁっ、これ凄いよっ……！亀頭がプニプニって包まれてっ……！！」

「ふふっ……いい顔ですね……私も興奮してきます……！」

待ちに待った眼孔姦の快感に呻く。

膣や口に比べて狭い眼孔ではチンコの長さ全てを受け入れるなんて事はできず、カリ首までが挿入された所で先端が一番奥に突き当たってしまう。太さに関してもギリギリ収められたって感じで、亀頭の表面全部がピッタリと眼孔の粘膜に貼り付いてるのがわかる。けれどもピッタリと包み込まれているからこその圧迫感は気持ちよくて、そして何よりも自分のチンコが女の子の眼に突き刺さっているという異常な光景自体が俺の興奮を高める最高の材料になってくれた。

「これで終わりじゃありませんよ？もっともっと気持ちよくして差し上げますっ……」

チンコが挿入されたままの状態で、首や頭を動かして顔の角度を変えていくユンちゃん。
彼女が動くたびに眼孔に包み込まれた亀頭がグリグリと撫で回されて、粘膜同士が擦れ合う鋭い性感がゾクゾクと背筋を駆け上がっていく。

ギュッ……ジュプッ……！

グリグリと撫で回すものから前後に往復するものへとユンちゃんの動きが変わる。
あえて右眼を強く閉じた状態で行われる前後運動は、抜き差しで擦られる刺激に加えてチンコを挟み込む瞼の感触が感じられて堪らなかった。

「気持ちいいですか？気持ちいいですよね？お客様のおちんちんが私の右眼を犯してる様子、しっかり見ていてくださいね！」

言われなくたってもちろんガン見だ。

チンコを引き抜く時にはカリ首に引っかかった瞼が吸い付くように伸び、逆に挿れる時には閉じたままの瞼が亀頭で押し拡げてられていく様子は視覚的にも俺を興奮させてくれて、限界に近づいたチンコがピクピクと痙攣し始める。

「うぅっ……ユンちゃんっ、お願い……竿も触って！」

徹底的な亀頭責めに我慢ができなくなって、竿を触って欲しいと懇願する。
その言葉を聞いたユンちゃんは口元に淫靡な笑みを浮かべると、待ってましたとばかりにハイペースで手コキを始めてくれた。

シコシコシコシコシコッ、グチュッ！グチュッ！

眼孔と瞼で亀頭を愛撫し続けたまま、竿の部分を手でシゴいてくれるユンちゃん。
ようやく全体に刺激を貰えた俺のチンコは嬉しそうに震えだし、あっという間に射精の準備を完了させてしまう。

「あぁっ……出るっ！出すよ、ユンちゃんっ……！！」

「はい、いつでもどうぞ。しっかり右眼で受け止めて差し上げます……！」

ユンちゃんは最後のダメ押しとばかりに眼孔の一番奥まで亀頭を受け入れ、瞼までもを使ってギュウギュウと締め付ける。
今までの中で最大の刺激を受けてついに限界を迎えた俺は、彼女の眼の中に盛大に精液を吐き出してしまった。

……ドピュッ！！　ドプッ！ドププッ！！　ビュルルルル！！！

「はぁっ……はぁっ……眼孔姦、気持ちよかったぁ……！」

「いっぱい出てましたもんね……お客様の精液、とてもあたたかいです……」

チュポンッ……という音とともに眼孔からチンコを抜き取ったユンちゃん。

右眼を閉じたまま立ち上がった彼女は俺の顔に自分の顔を近づけ、見せつけるようにして閉じていた右眼をゆっくりと開いていく。

「眼の中がお客様の精液でいっぱいです……ほら、目を開けるとこぼれ落ちてきますよ……」

白い涙のように流れ落ちる精液、開いた上下の瞼を繋ぐように糸を引く精液、そして白く染まった眼孔内部の全てが至近距離でよく見える。

ユンちゃんの綺麗な顔にポッカリと空いた右眼の空洞が精液によって白くコーティングされたその姿に、美しさやグロテスクさ、喪失感、背徳感などの色々な感情が混ざり合ってとても危険な魅力を感じてしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「ご満足いただけましたでしょうか？」

拘束を全て解いてもらい、お互いに後片付けをしているとユンちゃ

んが話しかけてきた。

「最高だったよ。眼孔姦はもちろんだけど、手コキもすっごく上手で気持ちよかったし」

「お褒めいただきありがとうございます。もしよろしければまたご指名して貰えますと嬉しいです」

「うん、するする。次も絶対ユンちゃんを指名するよ！」

今回は俺が気持ちよくしてもらうばっかりだったので、次は彼女と一緒に気持ちよくなるのもいいと思う。別にこの店は本番が禁止されているわけでもないし。

かなり攻め攻めでＳっ気の強かったユンちゃんが普通のセックスでどんな風に乱れるのかなんて事を妄想しながら、俺は次回の来店スケジュールを頭の中で組み立て始めた。

身支度を終わらせてふとユンちゃんの方をみると、ちょうど右眼の中に自分の義眼を入れようとしている所だった。

彼女の手に握られた義眼を見てある事を思いついた俺は、最後にその思いつきをやってくれないかとお願いしてみる。

「ねぇユンちゃん、最後にひとつだけお願いがあるんだけどさ、その義眼を口に咥えてみてくれない？」

「唐突ですね……まぁ、その程度でしたら構いませんが。ほふへひょうは？（こうでしょうか？）」

「そうそう、義眼の瞳はこっちを向くようにして……両目は開いてもらって………ああっ、いいっ！いいよぉ！！」

「ほんはほはいいはんへほふはほひはへんへ……（こんなのがいぃなんてよくわかりませんね……）」

「何喋ってるかわかんないけどユンちゃん最っ高！ありがとう！！」

本物そっくりの義眼が口に咥えられて、本来眼球があるはずの右眼部分に大穴だけが空いているユンちゃんの顔。

偽物だとはわかっていても、抉り取られたばかりの眼球を自分で咥えさせられている様にも見えるそのシチュエーションに、俺はひとりテンションが上がってしまう。

「よし、堪能した！ユンちゃんありがとう、次もまた来るからね！！」

「はい、おはひひへおひはふ（はい、おまちしております）」

突然のハイテンションにちょっと困惑気味なユンちゃんに見送られ、俺は部屋を出ていったのだった。

第三話　舞台裏：トヨ（乳房・性器・右腕欠損）　ネナ（四肢欠損）

「トヨちゃん、今回も楽しかったよ。また来るからね」

「はい、またのご指名お待ちしております」

私に向けて手を振りながらお客様さんが満足そうに部屋を出ていく。健常な左手ではなくあえて右腕の断端を振ってお見送りしてあげると、それを見たお客様はより一層嬉しそうな笑みを浮かべてくれた。

ここは風俗店アクロト。店名の由来となったアクロトモフィリアが示す通り、身体欠損をした女性たちが働く欠損フェチ向けの風俗店。

そして私、トヨはここで働く風俗嬢だ。……いや、風俗〝嬢〟と言うと少し語弊があるかもしれない。だって私の身体にはもう女性としてのパーツは何一つ付いていないのだから。

かつて莫大な借金を抱えていた私は、返済のために連れて行かれたオークション会場で乳房、外性器、膣、子宮、卵巣という女性としての器官と右腕をひとつひとつ順番に切り取られ、それぞれを別々に売られてしまった。

そんな悪夢のようなオークションから一年が過ぎた現在、私はひょんなことからこの店のオーナーと出会い紆余曲折の末に風俗嬢として働いている。

いくら欠損フェチ向けとはいえ、おまんこもおっぱいも存在しない身体で風俗嬢が務まるなんて当然最初は信じられなかった。けれども驚いたことに人間の性癖というのは本当に幅広いようで、一部の筋金入りの変態を中心に一定の指名は確保できているのだった。

オークションによって物理的な意味で身体を売られてしまったのに、今度は更に風俗で性的な意味で身体を売るなんて自分でもどうなんだろうと思うこともある。

でも驚くべきことに、女性の象徴となる部位が切り取られていく様子をショーとして男たちの見世物にされたにも関わらず、何故か私の心には男の人や性行為自体に対する恐怖や嫌悪感などが浮かんでくることは殆ど無い。

それどころか片腕と性的な部位全てを失った欠陥だらけの身体に興奮してくれるような男性を相手にするこの仕事は、終わってしまったはずの私の女としての自尊心を回復させてくれるようで案外悪くないものだとすら感じられていた。

「よし、終わりっ。受付さんに電話しなきゃ」

この店には『お客さんが部屋を出たら、すぐに風俗嬢側も受付へ連絡する』という独自のルールが存在している。

元々は両腕欠損などの自力で体を洗ったり服を着たりするのが難しい人が手伝ってくれるスタッフを呼ぶ為にやっていた事で、お店側としても各部屋の状況がわかりやすくて助かるということでいつしか全員のルールとなっていったらしい。

ちなみに各部屋に備え付けられている連絡用の電話は音声認識とスピーカーモードにも対応していて、手足が全部欠損している人でも使用するのに支障は無いとのことだった。

プルルル……プルルル……

今回も特に報告すべきようなトラブルは無かったし、ただ終了連絡をするだけだろうと頭の中で簡単に文章を組み立てながら電話をかける。

……ガチャ

「もしもしトヨです。……はい、さっきお客さん帰られました。……………はい、はい、特に問題は無かったです」

「……お願いしたい事？…………えっ、ネナさんですか？……はい、もちろん知ってますけど」

「……はい……はい…………わかりました。このままネナさんの所に行って一緒に身体を洗ってきます。……はい、お疲れ様でした」

……ガチャン

こちらからの終了連絡だけだろうと思っていたら、向こうから頼み事をされてしまった。内容はネナさんがシャワーを浴びるのをお手伝いして欲しいという物。

ネナさんは手足を４本とも失ってしまった女性で、私と同じくこのお店で働く風俗嬢だ。
欠損フェチの中では割と王道だと言われている〝達磨〟という性癖にピタリと一致する彼女は、明るくて人当たりの良い性格も相まってお客さんからの人気がとても高いらしい。

そんな人気風俗嬢のネナさんだけど手足の無い身体では自力で出来ることは非常に限られているため、シャワーや移動といったお客さんの相手をする前後での作業にはどうしてもスタッフさんのサポートが必要になってしまう。
ところが今はどうやらそのスタッフさんが遅れているらしく、このままではネナさんが次の指名に間に合わないとのことで急遽私にサポートのお呼びがかかったのだった。

（待たせるのも悪いし早速移動しますか）

さすがに裸で廊下を歩く事は出来ないのでバスローブを軽く羽織る。
その時にふと思いついた「私にはもうおまんこやおっぱいという隠すべきものは付いてないし別に全裸でも問題ないのでは？」なんて自虐的な思考を頭から振り払い、私はネナさんの部屋へ移動していった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

「あっトヨちゃん、待ってたよ〜。突然の事で悪いんだけどよろしくね」

部屋に入るとすでに全裸のネナさんがバスルームの扉の前で私を待っていた。

同じ場所で働いている以上彼女の姿を見た事や会話をした事は何度もあるけれど、実はこうしてしっかりと裸を見るのはこれが初めての機会だ。

付け根から5センチ程度の短い断端が服などで隠されることもなく剥き出しになり、本来なら手足が生えているはずの位置には縫い閉じられた時の縫合痕だけが残っているネナさんの身体。まさしく〝達磨〟な姿に衝撃を受けた私は、つい部屋の入口で立ち尽くしてしまっていた。

「あれ〜、ボーッとしちゃってどうしたの？もしかして私のだるまボディに見とれちゃった？」

「えっ？あっ、ごめんなさい！本当に手足が無いんだってちょっとびっくりしちゃって……」

「もうっ、そこはお世辞でも見とれちゃったって言ってほしかったな〜。まぁいいや、そろそろドア開けてもらっていいかな」

「す、すみません！今開けますね」

ネナさんに声をかけられて我に返った私が慌ててバスルームの扉を開けてあげると、彼女は短い手足を器用に使って敷居をよじ登りあっさりと中に入っていった。

「どう、驚いた？こんな身体でもこれくらいの移動はできるんだよね」

そのままバスルーム内を這って移動し、備え付けられたソープマットの上に陣取るとちょっと得意げな顔を見せるネナさん。それを追いかけるように私も中へ入り羽織っていたバスローブを脱ぐと、今度は彼女のほうが私の身体に驚く番だった。

「うわぁ……無いとは聞いていたけど実際に見ると凄い傷跡……」

私の胸を凝視して、思わず……といった感じで呟いたネナさん。私の胸には乳房を根本から切り取られた時の丸い切断面が傷跡としてそのまま残っているから、それを見て驚いてしまうのも無理は無い事だろう。
ここでのお仕事を続けるうちにそういった反応にもすっかり慣れてしまった私は胸を手で隠す事もせず、むしろその傷跡を見せつけるように彼女の元へと近づいていった。

「やっぱり驚きますよね……気になるんでしたらもっとじっくり見てもいいですよ」

「うん、トヨちゃんにおっぱいが無いっていうのは知ってたけど、もっとこう……縫われた感じなのかなって思ってたからね〜。それかもっとギザギザした感じの痛々しいやつかなって」

「こんな風に丸い傷跡だとは思ってなかったってことですか？」

「そう、そういうこと！おっぱいのあった位置がハッキリわかっちゃうのが凄いな〜って思ったんだよ」

そんな会話をしながら、私は指先で傷跡と肌の境目をグルリとなぞってみる。
自分で傷跡を触っているとおっぱいが身体にちゃんと付いていた頃を思い出してかなり寂しい気持ちになるけれども、だからといって密かに自慢だったおっぱいを完全に忘れてしまうのもそれはそれで嫌だと思う。

「トヨちゃんってさ、〝下〟も無いんだよね？」

私が自分のおっぱいについて考えていると、そんな言葉と共にネナさんが私の胸からその下へと視線を移動させていく。
かなり無遠慮な行為にも関わらずほとんど嫌な気持ちがしないの彼女の人柄によるものか、それともただ私の心が麻痺してしまっただけなのか。

「あれっ、おまんこちゃんと付いてる……？うーん……でもこのおまんこ、なんか違和感があるな～。これもしかしてオナホ？」

私の股間が想像していたものと違っていた為なのか、ネナさんはちょっと驚いた感じで口を開いた。
その言葉の通り、女性器をくり抜かれてぽっかりと穴が空いているはずの私の股間には、肌色のシリコンで作られたオナホールが嵌っているのだった。
ちなみに、おへその下にうっすらと残っている子宮摘出時の縫合痕については、薄すぎたせいかどうやら気付かれなかったらしい。

「はい、そうです。ただのオナホールですよ。ほら、形はそれっぽいですけど内側まで全部肌色でしょう？」

説明をするように、股間に装着されたオナホールを左手の人差し指と中指でくぱぁと拡げる。
触っても気持ち良くもなんとも無い偽物のおまんこの中から、さっきのお客さんに出された精液がローションとともにドロリと流れ出てきた。

「なるほどね～、精液が出てきたって事はこれ使ってお客さんとエッチしてるんだ。オナホって普段も付けっぱなしだったりするの？」

「いえ、プレイの時だけなのでいつもは外してますよ。こんな感じ

で」

そう言って私はオナホールを固定するために貼り付けているテープを剥がし、股間の大穴から偽物のおまんこをゆっくりと引き抜いていく。

（うぅ……やっぱりこの抜けてっちゃう感覚はどうしても慣れないな……）

実を言うとオナホールを股間に装着して行う疑似セックスは、私としても結構お気に入りのプレイだったりする。性感や挿入されたおちんちんの感覚が一切感じられないという虚しさを差し引いたとしても、普通のセックスのように男性に抱かれ、女として求められている事を実感できるのはやっぱり嬉しいからだ。

だけど、こうやってズルリ……とオナホールを抜き取る瞬間だけは、細長いナイフによってくり抜かれた私のおまんこが身体からズルズルと滑り落ちてしまったあのオークションの時を思い出し、どうしても悲しくなってしまうのだった。

（私のおまんこ、まだあの落札者に使われちゃってるのかな……？もし飽きて捨てられちゃってたりしたら……それはそれで嫌だな……）

抜き取ったオナホールを手に持った格好のまま失われてしまった本物のおまんこに思いを馳せていると、私の耳にネナさんの明るい声が届いた。

「おぉ～、そのオナホが今のトヨちゃんのおまんこって訳だ。義手義足ならぬ義まんこだね」

「義まんこ……確かにそういう言い方もできる……かも？」

「そうだ、いっそのこと特注で作っちゃうのもいいんじゃない？ほらあの、エピ……エピなんとかみたいに」

「エピテーゼ、ですか？欠けた身体の部分にそっくりの物を作って見た目を補うっていう」

「そうそれ！あんな感じでおまんこもおっぱいも作っちゃえば？シリコン製なら挿入されたり揉まれたりも出来るだろうしさ」

エピテーゼについては前に自分でも調べたりしていて、見た目だけとはいえ元に戻せるのは悪い話じゃ無いと思った事もある。
でも、結局それらのパーツはあくまで作り物だからいくら触っても感覚が無いって事や、取り外すたびに感じてしまうだろう喪失感を考えるとあまり実行する気にはなれなかった。

だってただのオナホールを取り外すだけでもかなり気分が沈んでしまうんだから、本物そっくりのおっぱいやおまんこを取り外す事に心が耐えられる訳がない。実際におっぱいやおまんこを切り取られてしまったあのオークションでの光景を鮮明に思い出してしまいそうだ。

「うーん……どうせ偽物だって考えるとそんなにでもないって感じですね。余計に悲しくなっちゃうかもしれないですし……」

「ふ～ん。ま、考えは人それぞれだしね～。ところで知ってる？この女の子の中には義手とかを本物に見立てて〝切断ごっこ〟をする人もいるんだよ」

「切断ごっこ？」

「そう。お客さんがノコギリとかで切断するふりをしながら女の子の義手を取り外して、女の子の方もたった今腕が無くなっちゃったみたいな演技をするの。Ｓなお客さんに人気のプレイみたい」

「ひぃっ、それは流石に……私には絶対無理ですよ…………あっ、そうだネナさん、もう洗っちゃいましょう！頭からいきますね！」

唐突に聞かされた特殊プレイの内容にドン引きした私は、その話題を強引に切り上げるように慌ててネナさんを洗う準備を始めるのだった。

――

シャワーの音が響き渡り始めたバスルーム。私はネナさんを後ろから抱きかかえるような格好でソープマットの上に座り込み、彼女の頭を洗っていた。

「トヨちゃんありがと～。今回は髪とか顔とかに精液掛けられたりしてないし、軽く洗う程度で良いからね」

そんなネナさんの言葉に従い手早くシャンプーを終わらせた私は、泡を落とすためにシャワーを手に取る。

「それじゃ流していきますよ、目に入らないように気を付けてくだ

さい」

「は〜い」

頭が洗い終われば次は胴体の番だ。タオルを使って泡立てたボディソープを手で掬い、その手をそのままスポンジがわりにして彼女の身体を丁寧に洗っていく。

まずは首から肩、そして腕の断端という順番で泡を塗りつけていき、優しく撫でるように汚れを落とす。

皮膚で覆われたネナさんの断端はつるつるな上に柔らかくて、欠損フェチなんて無いはずの私でもずっと触っていたくなるような妖しい魅力を持っていた。

「ネナさんの断端、やっぱり綺麗ですね。私のとは大違い……」

「でしょ〜、でもトヨちゃんの右腕も改めて手術とかすれば綺麗にできるんじゃないの？」

「断端を整える為にもう一回骨とかを削るっていうのが嫌なんですよね、もうこれ以上腕を短くしたくなくて。それにこの傷跡だから良いんだっていうお客さんも居ますし」

使い道の無い短い断端が更に短くなったところで大差無いじゃないかと思われるかもしれないけれど、もうこれ以上はほんの僅かでも身体を減らしたくないというのが紛れもない私の本心だった。

断端が終わったら背中、その次はお腹、更にその次はお尻、そして

足の断端と次々にネナさんの身体を洗っていき、残りの場所は胸と女性器だけとなった。

「ネナさん、次は胸を洗わせてもらいますね」

「うん、優しくお願いね～。あ、ちょっとぐらいなら揉んでも良いよ」

後ろから抱きしめるような格好はそのままに腕を前に回し、ネナさんの乳房をすくい上げるような手付きで下乳部分から洗っていく。

（そうだ、この感覚……一年前までは私にも同じものがあったんだよね……）

おっぱい特有のフニョンとした柔らかい感触や重さを手の平に感じた瞬間、私の頭の中に懐かしいという感情が浮かび上がる。

膨らみの外側から撫で回すようにしておっぱいを洗っていくと懐かしさはどんどん大きくなっていき、それと比例するように私にはもうおっぱいが存在しないという喪失感も強くなってしまう。

そんな喪失感は考えないようにとなるべく無心でおっぱいを洗い続けていたのに、指先で小さな突起を擦るのと同時にネナさんが身体を震わせたのがわかってしまった。

（あっ、これ乳首だ……ネナさんピクッてしてた。そうだよね、乳首って敏感だもんね……）

指先が乳首に触れる度にその刺激で身体を震わせるネナさんを見ていると、「もう自分は同じように乳首で感じることができない身体だ」という現実を突き付けられているように思えてしまい、押し殺

していた喪失感がこみ上げてくる。

(乳首固くなってきてる……こういう風にコリコリするともっと気持ち良いんだよね。だって、私がそうだったんだから……)

自分の身体に付いていたおっぱいの事を思い出すように、手の中にある膨らみを揉みしだいたり突起をつまんだりとひたすらに弄り回す。

一年ぶりにおっぱいを触れているという嬉しさと、いくら触っても自分の身体は何も感じないという虚無感。プラスとマイナスの感情がグチャグチャに混ざり合って頭がおかしくなりそうだったけど、だからといって弄る事をやめるのも何故かできなかった。

(おっぱい……おっぱい……もっと触っていたい…………でも触っても気持ち良くない……うぅ……おっぱい……)

「んっ……!ちょっとトヨちゃん……んうっ!……なんか触り方がエッチすぎない?」

「……あっ!す、すみません!」

身体を洗うという目的すら忘れておっぱいに夢中になっていた私は、ネナさんによって正気に戻される。

「確かに揉んでもいいよって言ったのは私だけどさ～。流石にちょっと驚いちゃった」

「ごめんなさい、つい……」

「別に痛かったとかじゃないし謝らなくてもいいけどね～。おっぱ

いはもう十分だから最後におまんこを洗ってくれる？　今回はゴム有りだったから中に残ってはないと思うけど一応ね」

まださっきまでのグチャグチャな感情が収まった訳ではないけれど、次を促されてしまった私は彼女の股間に向けて手を滑らせる。

下腹部をなぞった時にふと、「この奥にはちゃんと子宮と卵巣が存在してるんだよね」なんて考えてしまったのは今の精神状態が不安定な証なんだと思う。だってお腹を洗っている間には別に意識なんてしなかったんだから。

「それじゃあ、おまんこ……触りますね……」

戸惑いながらもどうにか移動させた手でネナさんのおまんこをそっと撫でる。毛が綺麗に剃られていてツルツルな肌とピッタリと閉じられた割れ目は、当たり前だけれどもぽっかりと穴の空いてしまった私の股間とは全く違う感触だった。

肉厚な大陰唇をかき分けるようにゆっくりと指を沈め、おまんこの中を隅々まで丁寧に洗っていく。

ビラビラした小陰唇やちょっと窪んだ膣口と尿道口、包皮に覆われたクリトリスといった各パーツを指先でなぞっていくたびに、おっぱいを洗った時と同じような、いやそれよりももっとずっと強烈な懐かしさや喪失感を感じてしまう。

（おまんこだ……一年ぶりに触る本物のおまんこだっ……！　やっぱりオナホールなんかとはぜんぜん違う……）

オナホールのチープな造形とは異なるリアルな生殖器の形状、シリコンとは全然違うヌメッとした粘膜の触り心地、無機質な人工物には存在するはずが無い人体特有の体温、もっと刺激が欲しいとばか

りにヒクヒクと収縮を繰り返す膣口、それらの要素全てが「今触っている物は正真正銘本物のおまんこだ」というのを私の指に伝えてくる。

（もっと……もっと……！）

自分でもよくわからない衝動に突き動かされるように、ネナさんのおまんこを弄る左手の動きは加速する。
最初は優しく触るだけだった指の動きはどんどん激しくなり、膣の入り口を浅くほじったりクリトリスを撫で回したりともはや性的愛撫としか言えない物に変化していった。

「あっ……あんっ！トヨちゃん……あぁんっ！そんなにされたらイッちゃうよぉ……んぅっ！」

襲いくる快感に喘ぎ、ビクンビクンと身体を震わせるネナさん。
その興奮度合いを表すかのように、彼女のおまんこからはお湯とも泡とも違うヌメッとした液体が分泌され、クチュクチュといやらしい水音をたてていた。

（ネナさん気持ち良さそうでいいなぁ、私はもうこんな風になれないのに……羨ましい…………あっ、そっか）

快楽に悶えるネナさんを見ていた私は唐突に理解する。そうだ、ネナさんのおっぱいやおまんこを触っている時に感じていたこの衝動は嫉妬なんだと。
自分の身体からは無くなってしまった物がちゃんと付いているのが羨ましい。えっちな事をして気持ち良くなれるのがずるい。

そんな感情を理解した瞬間、私の目からは涙が溢れ、口からは嗚咽

すらも漏れ出てきてしまう。

突然泣き始めてしまった私に驚いたネナさんが、上半身を捻ってこちらに振り向く。

「えっ!?もしかしてトヨちゃん泣いてるの?どうして?」

「ちゃんとおまんこで気持ち良くなれてる……うぅっ……ネナさんが羨ましいって思っちゃって……ぐすっ……私はそういう事ができなくなっちゃったのにって……ひぐっ……」

「……そっか、辛いことを思い出させちゃってごめんね。私が助けになれることはあるかな?それとももう止める?」

途切れ途切れになりながらもどうにか言葉を伝えきると、ネナさんは私を気遣うような優しいトーンの声で何か出来ることは無いかと聞いてくれる。

中途半端で終わるぐらいならいっそ最後までやってしまった方がスッキリするんじゃないかと考えた私は、さっきまでの続きをさせて欲しいとお願いをしたのだった。

「あの……さっきのやつを、最後までさせてもらえませんか……?もうおまんこの無い私に、おまんこでイく姿を見せて欲しいです……」

「ん、わかったよ。体勢はこのままでいい?向かい合ったほうがよかったりする?」

「このままでお願いします。後ろからの方が自分のを触っていた時と同じ感じがするので」

左手しか使えないのをもどかしく感じながら、かつて私自身がしていたオナニーを思い出すようにネナさんのおまんこを愛撫していく。
割れ目をなぞるたびに奥からは次々と愛液が溢れてくるし、プリプリに勃起したクリトリスは軽く触るだけで全身がビクビクと痙攣する。
そういった女性のオナニーとしては当たり前の、でも私にはもう起こらなくなってしまった反応を見るたびに喪失感を感じてしまうけれど、それと同時に何か別の感情で心が少しずつ満たされていく気がした。

（気持ち良さそうなネナさんの事……もっともっと近くで感じたいっ……）

両足を絡みつけるようにしてネナさんの身体をより強く抱き寄せると、両足の無い彼女の腰は私の足の間にスッポリと収まり、逆におっぱいの無い私の胴体は彼女の背中と隙間なく密着する。
普通よりも近い距離で触れ合えているのはお互いに身体が欠損しているからという皮肉な状況でも、ネナさんが気持ち良くなっている姿をより近くで感じられるのは私にとって嬉しい事だった。

「ねぇ……あんっ！もっと……んんっ！奥まで挿れて？」

ネナさんのおねだりに後押しされるようにして、トロトロにほぐれた膣の中へと中指を侵入させていく。

（あったかくてヌルヌルで、いい感じに指が締め付けられてる……私のスカスカな穴なんかじゃなくてちゃんとしたおまんこだ……）

指で感じる粘液の温かさやぬめりも、膣壁に包み込まれてキュウキュウと締め付けられる感覚も、何もかもが既に私からは失われてしまった物。
失われ、忘れかけてしまっていたその感覚をもう一度記憶に刻みつけるかの様に、私はネナさんの膣をかき回し続ける。
「あぁっ……！　あぁぁんっ！！……いいよトヨちゃん……はぁんっ！もっと……もっと激しくしてぇ！」
中指を膣に挿入したまま、親指を割れ目の上部に持っていってクリトリスをこね回す。
女の身体で最も敏感な部位を刺激されたネナさんはさらに興奮してくれたみたいで、喘ぎ声や身体の痙攣はどんどん激しく、体温だってさっきまでよりずっと熱くなっていく。
そんな彼女の反応を密着した身体でダイレクトに感じていると、自分も同じ様に気持ち良くなれているという錯覚すらも起こりそうだった。
「いいよっ……はぁっ……あっ！もうっ……イキそうっ……んんぅっ－！－！」
膣の中に2本目の指を追加して、ラストスパートとばかりに快感を送り込む。
中指と薬指で膣内をメチャクチャにかき混ぜ、親指でクリトリスをグリグリと押しつぶすと、絶頂の予兆かの如くネナさんの身体はガクガクと痙攣し始めた。
（ネナさんっ……イッて！もうイケない私の分まで……思いっきり気持ち良くなって！！）

私の代わりにイッて欲しいという願いすらも込めて、一気にネナさんを絶頂まで押し上げる。

「んんぅっ！イクっ……あっあっ……イクぅぅっ！！……はぁっ……んっ……あぁぁぁあぁんっっっ！！！！」

背筋を限界まで反り返らせ、短い手足をパタパタと振り乱しながら、ついにネナさんは絶頂を迎えたのだった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

絶頂から戻ってきたネナさんの身体にシャワーをかけ、全身に付いている泡を流していく。

「トヨちゃんってこのお店に来てからは半年くらいだけど、欠損してからだとどれくらい経ってるんだっけ？」

「大体一年くらいですね」

「そっか〜、そのくらいだと確かにまだ未練みたいなのも感じちゃうよね」

「はい……他人の右腕については割といつも見えていたのであんまり気にならなかったんですけど、おっぱいとかおまんこを触ったのは欠損してから初めての事で……」

「それで嫉妬して、思いっきりイカせたくなっちゃったと。どう？少しは楽になった？」

そう聞かれるとどうなんだろうか？ネナさんをイカせたことで精神が落ち着いたのは間違いない。

ただそもそもの話、今回みたいに他人のおっぱいやおまんこを見ることがなければこんな嫉妬は感じなかったという気もする。

「たぶん、大丈夫だと思います……でも、もう今後こういったお手伝いは出来なさそうです、ごめんなさい」

「ううん、いいんだよ。こっちこそ辛い思いさせちゃって本当にごめんね。スタッフたちにも次は無いようにってしっかり言っておくからそこは安心して」

「ありがとうございます、ネナさん」

コンコン……

お互いがお互いに謝っていると、遅れていたスタッフさんが到着したらしくバスルームの扉がノックされる音が聞こえた。

「あ、スタッフも来たみたいだね。入っていいよ～」

ガチャ……

「ネナさん、遅れてしまい申し訳ありませんでした。トヨさんも今回はありがとうございます」

「予定通り身体は全部洗ってもらったから後はお願いするね～」

「かしこまりました」

スタッフさんは慣れた手付きでネナさんの身体を拭くと、彼女を抱きかかえてバスルームから出ていく。

「今日は本当に助かったよ。また控室とかでもお話しようね〜」

スタッフさんにだっこされた状態のまま短い右腕を振って別れを告げてくるネナさんに対し、私の方も右腕の断端を振って挨拶を返したのだった。